

ラスキンの芸術教育論 ——芸術と道德の関係についての考察——

佐々木 正 昭

ラスキンの芸術観

ラスキンがオックスフォード大学入学直後（1830年）、『ブラックウッズ・マガジン』に掲載されたターナーの悪評に義憤を感じて反論を書いたことが、1843年出版の『近代画家論』第1巻執筆の契機となったことはよく知られている。そしてラスキンの鑑識眼がいかにか鋭いものであったかということは、後のターナーの歴史的評価によって証明されたといえよう。ラスキンがターナーを初めて知ったのは、13歳時の誕生日であったといわれる。この日ラスキンは、ロジャース著『イタリア』を送られ、この書のターナーの挿絵に強い感銘を受けたのである。以後ラスキンは終生ターナーへの評価と傾斜を変えることがなかった。このことは、ラスキンが自己撞着の強い世間知らずの面があったけれども、ニーチェのワグナーに対する態度のように決して激情に駆られることなく温かい心もちつつも冷徹な鑑識眼と一貫した姿勢を有していたことを物語るものである。又ラスキンは『近代画家論』第2巻（第2巻の刊行は1846年）執筆のために1845年初めて両親の庇護を離れて一人ヨーロッパを旅行した。この時彼はヴェニスでティントレットの作品に触れて大きな衝撃を受け、異教徒の文化であるイタリア芸術への目を開かれた。『近代画家論』第1巻のテーマがターナーや自然に集中しているのに対し、第2巻ではティントレットやフラ・アンジェリコがターナーと共にラスキンの主要な関心事になっているのはこのためである。ラスキンは一体ターナーやティントレットの絵画

に何を認め、何を世の人々に訴えたかったのか。『近代画家論』第1巻第2巻に述べられている彼の芸術についての考え方を垣間みることにしよう。

私達は芸術（絵画）をみることによって快さ・喜びを得る。ラスキンは絵画によって提示されるこの快さ・喜びの原因を、自然に類似することを認めることによって得られる快さ・喜び（真の観念）、絵画の題材の物象の美によって得られる快さ・喜び（美の観念）、これら物象の意義と関係から得られる快さ・喜び（関係の観念）に分類し、第1巻において真の観念を、第2巻において美の観念と関係の観念について説いたのである。特に美の観念についてラスキンは、成長と衰退との間の様々な姿をとる自然の中に、典型美（Typical Beauty）と生命美（Vital Beauty）があると言い、典型美とは神的属性を示す次の六つの型において顕現するとするのである。無限性（神の不可解性）、統一性（神的包括性）、休息（神的恒久性）、左右同型（神の正義）、純粹（神的精力）、節度（法による支配）。そして「上に列挙した諸持質は、我々人間の教訓又は享受の事柄にのみ刻印されるものとして考えられるべきではなく、神がその仕事を完成するに伴う必然的結果であり、神が創造したものに必ず押される神の像の刻印として考えられるべきだ。」¹⁾と述べ、さらに次のように言う。「神の諸属性のうちの一つの型、又はその型に類似のものから、又は属性そのものから、我々が不斷に快樂を得るという事実は、人間の本質に就いて証明され得るすべての事柄の中でも最も光輝あるものである。つまりそれは、我々と下等動物との間には特別の分離があることを示す大きな溝を設定するだけでなく、暗くおおいわたした神の様々な顕現に対し、我々が現在の所は弱々しく、又思慮なく喜びを見出している、神との究極的には深く、密接で意識的な親交を約束しているように見える」²⁾。又活力美について、ラスキンはこれを「生物において機能が適切に遂行されたことの現われ、特に人間においては完全なる生を欲ばく又正しく遂行することの現われ」と定義してこの美を私達が十分に享受するには、

それが神の法に従った秩序の美であるが故に、豊かで鋭い感受性と正確な道徳的判断のできる心と誠実さをもつ必要性があること、これらをもってすれば変態を遂げる生物の中に、諸種の理想的形態や理想的特質が入れ替わって顕現することを認めることができること、特に人間の場合には知性、道徳的感情が全身に作用することと、正しきクリスト的な心が人間から悪徳を除き、人間の理想をもたらすものであること⁴⁾、を説くのである。

以上美の観念についての二分類が外面的なものであるのに対して、これらの美の快さ・喜びの諸源泉は、「それらがその影の下を通り過ぎる心の反映を絶えず受け、心の表象によって変様され、彩どられている」⁵⁾のであって、この変様、変態 (Modification) をラスキンは相像力の作用とみるのであり、この想像力の完全な機能は究極の真理についての直観的知覚であるとするのである。⁶⁾ さらにラスキンは道徳的感情の強さと想像力の強さの間には相関作用があるとする。何故ならば「一方に於いて最も鋭い思いやりの心を持つ人々は、最も精密に見、最も深く洞察し、最も確実に把握する人々であり、他方に於いて事物の憂鬱な深みをかくの如く洞察し、観察する人々は、最も強度の熱情と最も温和な思いやりの心で満たされているからなのである。」⁷⁾

以上『近代絵画論』第1巻第2巻から、芸術並びに美についてのラスキンの見解を垣間見た。ここでは既に真、善、美さらには聖が分ち難く結合した見解が示されている。そしてそれは、古代ギリシャのカロカガティアや英国のワーズワス、コールリッジ等のロマン派の伝統につながる見解であるといっていよう。そしてこのように美と善さらには聖の結合として、世界や人間の仕事、労働、義務をみる考え方、このような芸術、美についての考え方は、ラスキンのライト・モチーフとして彼の生涯を貫いているのである。

『近代画家論』の第3巻と第4巻は1856年、第5巻は1860年に完成した。ラスキンが23歳のときに書き始めた『近代画家論』は、ラスキン40歳の年、実に

17年間の歳月の末に完成したのであった。ラスキンはこの書によって絵画評論家として自己の名声を獲得したのであり、『近代画家論』は、新しい時代の波にのった近代絵画評論の典型としての古典となったのである。従ってこの書はラスキンの義憤の軌跡であると共にラスキンの自己成長の記録でもあり、さらに又啓蒙を意図した教育の書でもあったのである。

さて『近代画家論』第3巻第4巻の出版が1856年まで遅れたのは、既述の聖ロコ学林での体験が、ラスキンに『ヴェニス石』第1巻（1852年）第2、3巻（1853年）を書かせたからだといわれる。『ヴェニス石』は1849年に出版された『建築の七灯』の思想をさらに展開したものである。この書『ヴェニス石』で『建築』という主題を用いることを、ラスキンは「人々は絵画や彫刻を買わずして生活し得る。しかし建築においては、すべての人が何らかの形で関わらねばならぬ⁸⁾」という視点から捉えているのであって、この点は彼のイギリス人らしい実用主義、並びにのちの労働者への芸術教育の必要を説いた彼の姿勢と関わっているので注意しておきたい。この書においてラスキンは次のように主張する。ヴェニスの芸術から得られる一つの立証は「その政治的繁栄の衰退は、その国家的及び個人的宗教の衰退と精密に一致する⁹⁾」こと、ヴェニスのゴシック建築の美しさは、当時のヴェニスの市民たちが美しい道徳心と敬虔な宗教心によって躍動する魂の悦びを有していたことによるもので、ルネッサンスの建築はこれらを失ったがために醜悪になった¹⁰⁾、と。次の装飾についてのラスキンの言葉は『近代画家論』と一貫した彼の考え方をよく示している。

「私が強く主張したいのは次のことである。何處で見出され、又いかように発明されようとも、美しい装飾は常にある恒常的な自然の形態を、故意にか、無意識にか、模写したものに外ならない。そして、特にこの場合には、我々自身の発明によるこれらの幾何学的形態に我々がもつ喜びの激しさの度合は、創造主がこれ等の形態を愛好するよう我々の上に印刻した自然傾向に依存するので

あって、これらの形態へと大地が進みゆくよう神は大地を我々に与え給うたのであり、それらの形態から創造主は我々の身体を形成して、喜びが深奥の境から分離された時、それを編み込み給うたのである。¹¹⁾」中世が暗黒時代ではなく、幾多のゴシック建築やダンテの「神曲」を生み出した信仰を基礎とした高い精神力に支えられた時代であった、とするラスキンのこのような主張は、彼の識見を示すものである。そしてこの考え方からラスキンは18世紀中葉以来のゴシックのリバイバルに賛意を表したのであり又、ラファエロ前派運動への支援を行なったのである。

ラスキンは『近代画家論』『建築の七燈』『ヴェニス石』によって近代的な美術批評家としての地位を確立した。時まさに産業革命によってイギリス経済機構に大変動が起こり、王侯、貴族、教会の地位、権力、財力が相対的に低下し、いわゆるヴィクトリアン・ミドルクラスが台頭していた。王侯貴族、教会の権威の失墜はこれらに召しかかえられていた芸術家たちの自立を促し、新しい時代と共に芸術作品は市場において売買されるようになったのである。即ち芸術作品はそれ固有の価値の他に、商品としての交換価値をも有するようになったのであり、ここに目ききとしての美術批評家が登場する余地が生じたのである。このような意味において、ラスキンは近代美術批評家の先駆者であり、時代の影響を大きく受けていたのである。

一方、産業革命による機械の発明と機械を備えた大工場の出現は、大量の生産手段をもたぬ労働者を出現させ、彼らの悲惨な労働と生活、人口の都市への流入、その他これに付随する多大な環境の変化と悪化の問題を生んだ。このような状況に立って史的唯物論の視点から、独自の理論を展開したのは、ラスキンと同時代人であるマルクスとエンゲルスであったが（マルクスはラスキンの前年に、エンゲルスはラスキンの翌年に生まれている）、ラスキンは、彼らに影響されることなく、古典経済学や功利主義を批判し、独自の経済学を唱導し

た。ラスキンのいわゆる人道主義的経済学は、初期のものとしては『芸術経済論』、その後『この最後の者にも』『ムネラプルウェリス』の著作に結実したが、体系的には未完に終わったのである。この後オックスフォード各地での講演とそれをまとめたものの出版、オックスフォードに美術学校を創設、「聖ジョージ・ギルド」という中世の手作業に回帰するユートピア的社会改革運動の開始、「聖ジョージ・ギルド」の活動報告並びに労働者階級へのアピールを意図した「フォルス・クラヴィエラ」の発刊等々の啓蒙家、社会改良家としての多面的な活動をしている。ラスキンの生涯は、通常『近代画家論』第5巻完結の1860年を境として、前半生と後半生とに分けられ、美術評論家としての前半生、社会改良家としての後半生、前半生の「明」、後半生の「暗」といわれたりもするが、既に述べたように、重点の移動こそあれ、又いかに喜劇的ドンキホーテ的な言動があれ、彼の思想と行動は、真、善、美、聖一体の世界観、人間観というライト・モチーフに貫かれているといえよう。その証左として『ヴェニス石』から、その消息をよく伝える所を少し抜き出して置く。

「そして注意してもらいたいのであるが、諸君はこの問題について断固たる選択をなすよう迫られているのである。諸君はこの生物たる人間を、一つの道具とするか、一人の人間とするか、どちらかなのであり、両方を為すことはできないのである。人間はおそらく人間の所作、行為のすべてにおいて精密かつ完全なるように、道具の精密さに合わせて働くようにできていないのである。人間にそのような精密さを求め、歯車がするように人間の指に度を量らせ、コンパスのように人間の腕に曲線を描かせんとするならば、諸君は人間を非人間化せねばならぬのである。人間の精神の全エネルギーが人間を歯車やコンパスにすべく傾注されねばならず、人間の全注意力と全力がこの卑しい行為の達成に向けられなければならないのである。精神を傾注した眼が指先に注がれ、精神力は、厳格な精密さを誤らぬように一日に10時間も、それを導く目にみえぬ

全神経をはりつめねばならぬのである。かくして精神も視力も疲れ果て、ついには全人格が失われてしまうのである。そう、この世界における精神力の知的活動に関する限り、鋸屑の山となるのであり、救われるとすれば、歯車やコンパスの形態には収まり切れず、10時間労働の後に炉辺の心温まる人間性へと拡大していくような、人間的な心情によってのみなのである。これに対し、労働する者を人間たらしめんとするならば、諸君はその人を道具たらしめることはできないのである。彼をして想像し、思考し、為す価値あるものを何でも為すよう促すがよい。ただそれだけで機械的正確さはただちになくなるのである。かくすると確かに彼の荒けずりな所、鈍い所、できない所がすべて表われて、恥に恥を重ね、失敗に失敗を重ね、行き詰り続けるが、同時に又彼の尊厳全体も表われてくるのである。彼の上にかかる雲をみて初めて、私達はその高さを知るのである。その雲が輝きに満ちたものであらうと黒くたちこめたものであらうと、その背後とその内面には、変化が起っているものなのである。」¹²⁾

「私がでたらめを話している、又は誇張して言っていると思わないで頂きたい。時代の他のいかなる悪にも増して、あらゆる国民の大衆をして、彼ら自身にもその本質の説明ができない自由に向けての、無益にして、支離滅裂且つ破壊的な闘争へと向わしめるものは、実に職工の機械への転落である。富と高貴な身分に対して彼らがあまねく叫ぶ声は、飢えの逼迫によるものでも、誇りを傷つけられたことによるものでもないのである。こうしたことは、今尚多くあり、又あらゆる時代を通して多く行ってきたことである。社会の礎石は今日程動揺させられたことはなかったのである。それは人々が栄養不足だからではないのであり、人々は自分達が糧を得る仕事に喜びが見出せないからなのであり、それ故に富をただ喜びの手段とのみみなすからなのである。それは人々が上流階級の侮蔑に苦しむためではなく、彼らは自分自身に我慢できないからなのである。何故ならば、彼らは彼らが運命づけられている苦役の類が誠に頹廢的なも

のであって、自分達を人間以下におとしめると感じているからである。¹³⁾

「私達は最近労働の分業という偉大な文明上の発明を大いに研究し、大いに完成させてきた。ただ、私達は、それに間違った名称を与えている。実の所、分割されているのは労働ではなく人間なのである。——人間が人間の断片へと分割され——生の小さな破片と碎片へと分割されているのであって、その結果、人間に残っている知能の小片のすべてをもつても、一本のピンや一本の釘をも十分に作りえず、ピンの頭や釘の頭を作るのがやっとなのである。さて一日に多くのピンを作るということは、実際、よいことであり、望ましいことであるが、それらの頭がいかなる水晶状の砂で磨かれるかということを見ることさえできるならば——それは人間の魂という砂であり、それが人間の魂であるということが識別され得るには相当に拡大されねば分らぬのであるが——私達は、そこにも相当損失があると考えるのであろう。溶鉱炉の爆音よりも大きい叫び声が、現代のすべての工業都市から起ってくるのはすべてまさにこのため——即ち私達はそこで人間以外のものならなんでも作るため——なのである。私達は木綿を漂白し、鋼鉄を鍛え、砂糖を精製し、陶器を製造するが、ただ一つの生きた精神を輝かせ、強くし、洗練し、形づくることは、決して利点として私達の評価に勘案されることはないのである。その声によって無数の多くの人々が駆り立てられる、すべての悪に抗する方法は、ただ一つである。それは教えることや説教によってではない。何故ならば、彼らに教えることは彼らの悲惨さを示すこと以上ではなく、説教することは、説教以外に何もせぬならば、彼らの悲惨さを侮辱することだからである。それはあらゆる階層の人々に、人々を高め、人々を幸福にするにはどのような類の労働が人間によいのか、ということについての正しい理解を得ることによってのみ、対応し得るのである。即ち、労働者の墮落によってのみ得られるような便利さ、美しさ、安価さをきっぱりと捨てさせることによって、又同様に健全にして、人を気高くさせる労働の

産物や諸結果をきっぱりと要求することによってのみ、対応しうるのである。¹⁴⁾

ラスキンの道徳観

ラスキンは、仮に信頼する医者から生命があと七日しかない、と宣言された場合の例を挙げて、「宣告を受けた人々がその七日間をいかに過ごすかが、徳の高さの正確な尺度になる」という。人間は通常死を直視しては生きていないが故に、このように急に死を宣告された場合、否応なく死を直視することを迫られると同時に又、過去の生への意義と反省と残された生のあり方を問うことを余儀なくされる。しかし人間の現在は、過去の自己のあり方に規定されるが故に、急に自己を変えることはできず、このような極限状況にあっては、はしなくも自己のすべてを露呈することになるであろう。この意味において、ラスキンの指摘は正しい。そしてラスキンはこのような状況におかれたならば、大部分の人は、ただ過去の回想や悔恨に耽って自暴自棄になるのではなく、自分が愛し又愛された人々、即ち残されるであろう人々のために、身辺を整理して充実した生を送ろうとするであろう、つまり、それに先立つ全ての日々よりもよりよく過そうとせぬ人はないであろう、と考える。それはつらいけれども敬虔に自己の生を引き受けた生であり、神の子としての義務と奉仕の充実した生であり、逆説的ではあるが有限であるが故に善びに満ち、有難さに満ちた生なのである。しかし考えてみると、千年が一日の如く感じられる、逆に一日が千年の如く感じられるような生のあり方こそ、偉大な仕事を生み出した人々の生活ではないのか。よい仕事とは、これこそ自分に与えられた仕事であり、これを為すこと以外に自分の仕事はないとする、純粋且つ自然な義務の本能から為された仕事であり、必要なものは何であれ夕べには神から与えられる、という確信のもとに、自らに快く、役に立つ事柄—神の意志に沿ったもの—を自然に為すことにある。このように考えるラスキンは、人間として、神の子として行

為すべき指標となるのは、絶対的な勇氣並びに秩序と愛（これは究極的には神のそれである）への強い憧憬であるとする。特に秩序と愛こそは、すべての力、欲望がこれに接木されるべきであり、すべての人間の行為の源となるべきものである、とラスキンは考えるのである。「道徳のエネルギーは秩序への愛によって現世の生活を処理、装飾、保持すること、つまり下等動物や私達の内にある反逆的、自堕落な諸力を処理（統制）することにある。又道徳のエネルギーは、他人にやさしくすることへの愛によって、自己を取り巻くあらゆる生活を正しく処理することにある。このように、これら二つの愛に接木することによって、他の熱情のそれぞれが十分な力を持つと同時に、尚かつ絶対的な統制のもとにあるように、他のすべての熱情を完全な形にすべきなのである。」¹⁶⁾

かくして「あらゆる熱情は強くあらねばならぬ。あらゆる熱情は完璧でなければならぬ。あらゆる熱情は軍馬の如く従順でなければならぬ」とするラスキンは、正義について「配慮された怒りの国家的表現」¹⁷⁾だとみなすのである。つまり正義とは、みせしめでも、予防的でも、教育的でさえもないのであって、「誉れにふさわしい所には誉れを、恥には恥を、喜びには喜びを、苦痛には苦痛を与える、評価、判断に基く応報の純然たる技術」¹⁸⁾なのである。そしてこの場合も、この怒りという熱情が恣意的なもの、単なる感情の憤出とならぬために、この熱情を優しさと秩序への愛から、その源を発するようにしなければならぬのである。

さて、人間の道徳の本質、自然については古くから性善、性悪説を中心に論議されてきた。ラスキンはこれについてどのように考えるのか。「プラトンのこの例（道徳を統治するイメージとしての二頭立ての二輪戦車）は必ずしも正しくない。つまり魂の戦車を引く馬には黒い馬はいないのである。馬を操る人の最も悪い欠点の一つは、馬を飢えて強欲にしまうことであり、今一つの欠点は馬を充分早くから慣らさないことであって、馬自体は善なのである。」¹⁹⁾「人

人間の自然（本質）は悪であると絶えず言われるが、そんなことは信ずるな。人間の自然は優しくて寛容であるが、同時に狭くて盲目的である。そして直接に見たり感じたりするもの以外は、困難を伴って初めて理解できるのである。人々は自分達と同様に他人を『想像』できることによって初めて、他人を自分達同様に世話するであろう。²¹⁾」ラスキンは体系的且つ詳細に性悪説や性善説について述べてはいないが、彼はここにみられるように、明らかに性悪説を退け性善説の側に立っているとみてよいであろう。そして、その説は観念的というよりは、実践的具体的にして非体系である。つまり彼は人間の自然は善であるけれども人間の心が時として狭く盲目的になり、矛盾を犯すものであること、自分と同様に他人の立場に身をおく豊かな「想像力」によって自己の蒙昧を開くものであることを説くのである。ここに説かれる道德観は「汝の隣人を汝の如く愛せよ」という聖書の言葉を想起させるが、それを「想像力」を介在させて、諸感情を高める作用を認める所に、ラスキン独自の道德についての見解がある。即ちラスキンは激情を抑圧することによって徳を立てるのではなく、激情を否定せず、それらを利己心のない想像力によって「高め」、善に向けて強くすることを主張しているのであって、ここには人間を精神と肉体の二元に区分する人間観、肉体を世俗や欲望に繋がるものとして蔑視せんとする西欧の伝統的二元論を退ける見解が示されているのである。

芸術と道德

ラスキンは、偉大な芸術の目的もしくは機能として、人間の宗教的感情の強化、人間の倫理（道德）面の完成、人間への物的奉仕（有用性と喜びを附与すること）の三項目を挙げる。²²⁾ 芸術と道德の関係に関連してみるならば、この第二番目の芸術の目的・機能に、人間の倫理（道德）的側面の完成をみるということは、芸術が一つの統合をなしており、ややもすれば道德と対立、もしくは

道徳を侵犯するものであるという一般通念に反するが、この見解の背後には、既に述べたように善・美・聖一体の考えがあるのである。このように考えるラスキンは、芸術は人間の道徳をあくまで練磨、完成させるものであって、芸術が道徳を産み出すとは考えない。つまり人は絵を描いたり、歌を歌ったりして善良な人になることはできぬのであって、まず善良な人、徳ある人になることによって、意味ある深い芸術が生まれてくる、というのである。彼はこれをまず言葉の場合をとって比喩的に説明する。「言葉に付随する徳は、すべての根源において道徳である。即ち話し手が真たらんと欲すれば、言葉は正確になるのであり、話し手が思いやりを持ち解りやすく話そうとするならば、言葉は明解になり、話し手が真剣であれば、力強くなり、話し手がリズムと秩序の感覚を持っていれば、こちよくなる。」²³⁾そして一国の国語が持つ美は、その国家存在の最も深い法則を示すもの故に、偉大な言語は単なる模倣によっては真似ることができない、それ故に国民の気質を厳格で男らしいものにし、人々の人間関係をまじめで礼儀正しく価値ある目的に向け、人々を正しい行為に従事させれば、人々の言葉は否応なく堂々としたものにならざるをえない、とするのである。このような言語と道徳の関係は通常あまり意識されることがないが、他の芸術にもあてはまる、と彼は主張する。例えば工芸の場合、工芸作品はそれを作製した職人の道徳状態を表わしていると同時に、多くの影響でみえなくなっているけれども、その職人が属している国家の道徳状態を正確に示している。そしてこれは技術の面においても表われると同時に、主題の選択においても道徳的気質が表われるのである。かくして劣った芸術家は、絶えず仕事の健全な必然性から逃れようとし、自分達に不相応な高貴な主題、モチーフのみに喜びを見出すのであるが、これは極めて危険な虚栄心からくるものであること、偉大な芸術家は強い情熱を持つけれども、沈着冷静であって、空の雲のあらゆる動きや情景の変化を映しながらも、それ自体は動かぬ山奥深くの湖のような

絶対的な静寂の中に身をおくことのできる人なのである。

ところが現代生活には完全さと素朴さが欠如して統一が破れ、混乱と数多くの模倣に満ちている。それ故に真に人間の精神を表現しているものが見分けにくくなり、いわゆる立派な芸術家の作品とその人格の間に不一致がみられる。ダンテ、ジオット、シェクスピア、ホルバインの人格については、何人も異論をささめだろうが、現代の芸術家のモラルにはこの分離がみられ、恐しくて分析する気にもならぬ、とラスキンは嘆くのである。²⁴⁾

そして人間の本質、自然の真実の見分け方としてラスキンは次のように述べる。²⁵⁾

- 1、あらゆる善なるものは、善なるものから生じるものであって、決して悪なるものから生じるのではない。
- 2、文学であれ、絵画であれ、その領域において真に立派である（多少的を外れていようと、又部分的に誤ちがあろうと）という事実は、それらが気高い起源を持っていることの証しであること。
- 3、もし為されたことの中に本当に真の価値があるならば、それが我々がたどれるよりも時としてもっと奇妙であり、非道徳な状態によって品位をおとし、汚れたものでも、それを為した魂の真正な価値から由来するものである。なぜならそれらは我々のものよりもずっと大きな人格の一部であり、人間の闇についての判断も我々の判断を遙かに超えていると同様、その高貴さにおいても我々の追隨を許さないからである。

つまり、ラスキンは、偉大な芸術家は、一般通念としての既成道徳を越えた所に道徳を置いているのであって、それはとりもなおさず、人間の自然・本質に基くモラルの探求であると考えているのである。そしてこれは次のような言明とも符合するのである。「最高の芸術（美術）は、目に見得べきものと道徳的な感情に関して、確かめ得べき最高の真理を我らに物語るよう定められてい

る。そしてこの事実の探究こそ芸術の重要な役割であり²⁶⁾「芸術がなし得る最高の事は、人々の高貴な人間の真実の相を現わすことである。」²⁷⁾

ラスキンは、真の正義、真の愛、真の気高さを求めることは、美への思慕に繋がる、逆にいうと美への愛は、正義、愛、気高さを求めるのであって、この美への愛こそあらゆる健全な人間の本質である。それ故に美への愛を強く持つ人は、情が深く、正義を愛し人間の幸福に資する識別者、宣告者であった、とするのである。このような視点からラスキンは、芸術程道徳的なものはない、勤勉さのない生活は罪であり、芸術性をもたぬ勤勉さは野蛮である、さらに「善」と「悪」という言葉は人間について使われる場合には、創造者と破壊者という言葉と殆ど同義である、とするのである。²⁸⁾

以上のようにラスキンは、芸術を個人の道徳的状態の表現であると同時に、個人を包む社会の道徳的状態の表現、指標である、という、いわば社会現象としての芸術観を示したのである。それ故に芸術が気高く、又より美しいものになるためには、社会のあり方が問われなければならなかった。そこで生きる個人が、生き生きとした状態で分裂することなく全人的に生活できることが、彼にとっては必須の要件だったのである。モリスが『ヴェニス石』のケルムスコット版の序文において「ラスキンがここで教えているのは、芸術は人間が労働の中に見出す悦びの表現であること、すなわち、人間にとって、自己の仕事に悦びを見出すことが可能だということである」²⁹⁾と述べたように、芸術は、生命力に満ちた個人の生活の中にあり、又それを可能にする社会の状態から生まれる、とラスキンは考えたのである。そしてそのような労働、仕事こそ労働と余暇が分離しないものであって、わざわざ週に一度教会へ行かなくても労働の中に日々主が宿り給うような生活即労働であり、美と敬虔が合致するような人間の美しい姿である、とラスキンは考えたのである。「主が自分の仕事を与え給うたと思って労働する少数の人々にとっては、神の慈悲は求める必要がない

のであり、彼らの精神的に広大な家は清められる必要がないのである。こうした人々には必ずや善きことと慈悲が伴うであろう。それも全ての生活と全ての日において。かくして彼らは神の御許に住んでいるのである——永遠に。³⁰⁾」ラスキンにとって芸術と道徳は、このように宗教を要として不分離の形で繋がっている。これは後のオスカー・ワイルドの「芸術家は美的なものの創造者である。(Dorian Grey)」という唯美主義的な言辭と対極をなす考えであるが、ラスキンの思想には、ラスキンが影響を与えたトルストイ程、悲愴且つ厳格でないところに、ラスキンの時代精神と彼固有の楽天的な性向があるように思われる。

注

Modern Painters 及び Stones of Venice のオリジナル、テキストは The Works of John Ruskin, M.A., Thomas Y. Crowell & Company, New York を使用し Lectures on Art は The Works of John Ruskin, George Allen, 1875 を使用した。尚本文中の和訳はすべて拙訳である。

- 1) Modern Painters, part III ,section 1, chapter XI ,§2
(以下 M.P., part III ,sec. I , ch. XI ,§2 と略す)
- 2) M.P., part III ,sec. I , ch. XI ,§4
- 3) M.P., part III ,sec. I , ch. 3,§17
- 4) M.P., part III ,sec. I , ch. 12,13,14
- 5) M.P., part III ,sec. II , ch.1 ,§1
- 6) M.P., part III ,sec. II , ch.3 ,§29
- 7) M.P., part III ,sec. II , ch.3 ,§10
- 8) Stones of Venice (以下、S.V.と略す) Preface
- 9) S.V., vol.1, ch, 1 ,§ 8
- 10) S.V, vol.2, second, or Gothic, Period, third, or Renaissance, Period.
- 11) S.V., vol.1, ch,20
- 12) S.V., vol.2, ch,6 §12
- 13) S.V., vol.2, ch,6 §15
- 14) S.V., vol.2, ch,6 §16

- 15) Lectures on Art, Lecture III ,§83 (以下 L.A. Lecture III §83 と略す)
- 16) L.A., Lec. III ,§88
- 17) L.A., Lec. III ,§89
- 18) L.A., Lec. III ,§90
- 19) L.A., Lec. III ,§90
- 20) L.A., Lec. III ,§89
- 21) L.A., Lec. III ,§94
- 22) L.A., Lec. II ,§32, Lec. III ,§66
- 23) L.A., Lec. III ,§68
- 24) L.A., Lec. III ,§75
- 25) L.A., Lec. III ,§76
- 26) L.A., Lec. III ,§31
- 27) L.A., Lec. III ,§31
- 28) L.A., Lec. III ,§95
- 29) 五島茂著「ラスキンとモリス」『世界の名著』41より重引。
- 30) L.A., Lec. III ,§96

参考文献

1. 内藤史朗著「ジョン・ラスキン—〈芸術教育〉の創始者—」『現代に生きる教育思想』イギリス篇所収、ぎょうせい出版、1982年。
2. 内藤史朗訳『芸術教育論』明治図書出版、1969年。
3. 御木本隆三訳『近世画家論』春秋社、昭和7—8年。
4. 賀川豊彦訳『ヴェニスの上』春秋社、昭和6—7年。
5. 石田憲次、照山正順共訳『胡麻と百合』岩波文庫、昭和10年。
6. 西本正美訳『芸術経済論』岩波文庫、1927年。
7. 〃 〃 『この最後の者にも』岩波文庫1928年。
8. 『世界の名著』41「ラスキン・モリス」中央公論社、昭和46年。
9. 佐久間政一訳『芸術講話』大正13年。
10. 袴田省三著「ラスキン『芸術教育論』」『芸術と教育』所収、講談社、昭和56年。
11. 鍋島能弘著『イギリス文学史大系、19世紀』研究社、1961年。
12. 講座『英米文学史』12、大修館、1971年。